

## 令和5年度 学校評価

評価の項目	①-1 教育課程・学習指導
今年度の重点目標	学習サイクルを確立し学習意欲を高める。
具体的取組	各学年と教科担当でその学年にあった家庭学習の取り組み方法を示し、継続して取り組ませる。プランニングタイムを通して、学習計画を立てることにより、学習の習慣化を目指す。また、各種たよりや懇談会などの場を通して、保護者の協力を求める。
担当	教務主任・各教科代表
現状及び取組状況	学習習慣が身につけている生徒と身につけていない生徒の二極化傾向にある。全体でも家庭学習の時間が少ない。
評価の観点	(成果指標) 家庭での学習が習慣化した生徒が増えた。
実現状況の達成度判断基準	学習・生活アンケート(生徒②)で 「家庭での学習時間が1時間以上の生徒」が、 A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満
判定基準(備考)	Dの場合は、取組を再検討する。
中間集計結果(%)	C(62.7%) ※62.0%(R4, 12)
分析 (成果と課題)	成果 1, 3年生の65%以上が、1時間以上の家庭学習をしている。(1年生69.4%, 3年生64.1%) 特に3年生は昨年度12月以降の伸びが大きい。(R4.12月:51.0%) 課題 2生では54.9%と低く、二極化傾向に変化が見られない。
今後の改善策	PTに対して学習委員会を活用するなど、生徒が主体的に参画する機能の構築を模索して行く必要がある。
最終集計結果(%)	D(58.4%) (1年:67.8 2年:35.5 3年:71.9)
中間結果との差(%)	-4.3%
分析 (成果と課題)	成果・直近の進路を見据えた傾向が3年生には強く表れた。 課題・2年生の家庭学習時間確保の下落傾向に歯止めがかからず、1年生も良好な変化がうかがえない。
次年度への改善策	・アンケート結果の実際を学年便りなどを用いて家庭につなげ、時間量としての必要性を問題意識として共有する。 ・システムとしては構築できつつあるPTを、生徒の主体性をくすぐり個の実施状況を懇談などで家庭と連携するなど、有機的な実践として取り組む。

## 令和5年度 学校評価

評価の項目	①-2 教育課程・学習指導
今年度の重点目標	個人を十分に把握し、個別最適な学習の方法を確立し学習意欲を高める。
具体的取組	生徒の実態を把握し、学び合いに加え、ICTを効果的に活用し、生徒が「わかった・できた・もっと知りたい」と感じる授業実践を行う。また、授業のユニバーサルデザイン（UDL）化、個人の定着度・理解度を鑑みた単元内での自由進度学習にチャレンジする。
担当	研究主任・教務主任
現状及び取組状況	生徒の実態に応じた実践をしているが、さらに生徒の「わかった・できた・もっと知りたい」を引き出す工夫が必要である。
評価の観点	（成果指標） 授業が分かりやすく、学習意欲が向上した。
実現状況の達成度判断基準	教科アンケート（生徒⑦）で 「先生の説明や質問、指示はわかりやすかった」（全教科の平均）が、 A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満
判定基準（備考）	Dの場合は、指導法を再検討する。
中間集計結果（%）	A(96.7%) ※95.1%(R4, 12)
分析 （成果と課題）	成果 UDを全授業で継続して行うができています。 また、ICTを活用し、視覚的に学び、情報の共有をできています。 課題 1年生のICTの活用のパーセンテージが低い。
今後の改善策	継続し、行っていくこと。 1年生の授業でも積極的に使用していく。
最終集計結果（%）	A(94.0%)
中間結果との差（%）	-2.7%
分析 （成果と課題）	成果 単元計画を生徒に提示することで、指示が分かりやすいだけでなく見通しをもって授業に参加できた。 課題 高い水準を保っているが、残りの数%（第2層支援生徒）への手立てが必要。
次年度への改善策	・UDの継続・ICT活用により視覚的に指示、説明をしていく。 ・単元、授業の見通しを持たせていく。

## 令和5年度 学校評価

評価の項目	② 生徒指導 ※いじめの未然防止
今年度の重点目標	情報の共有から行動実践へとつながる生徒指導体制を確立する。
具体的取組	「生徒指導委員会・各学年会」や生活ノートの記述、各アンケートや面談からの生徒の行動・言動より見取れる小さな気付きなどから情報を収集・共有し、組織的な対応を心掛ける。また事例検討会や校内研修等を通して指導体制を常に見直していく。
担当	生徒指導主事（生徒指導委員会）
現状及び取組状況	情報の共有から指導体制へとスピード感をもって対処・対応ができるように取り組んでいる。
評価の観点	（成果指標） 情報の共有がなされていたか。 情報の共有から方針・指導体制につながったか。
実現状況の達成度判断基準	教職員アンケート（教師⑳）で 「問題行動時の組織的対応の体制が整っている」が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満
判定基準（備考）	Dの場合は、方法・内容を再検討する。
中間集計結果（%）	A(100%) ※100%(R4, 12)
分析 （成果と課題）	成果：問題行動時の情報の共有はきちんとなされている。生徒指導委員会の情報についても各学年会などで報告されている。 課題：今年からWEBQUとなり、その周知をきちんに行い、窓口だけでなく、全教職員がWEBQUを見れるようになると良い。現在は各学年の先生が自分の学年は見れるようになっている。
今後の改善策	これまで同様に丁寧な対応を心がけ、先生方の情報の共有はもちろんのこと、保護者との連絡も丁寧に行っていきたい、（家庭連絡・家庭訪問等）
最終集計結果（%）	A(100%)
中間結果との差（%）	変化なし
分析 （成果と課題）	成果 問題行動の共有はきちんとなされている。いじめ問題は初期対応がカギになる。小さなことでも対策チームで方向性を確認し、組織的に対応していきたい。 課題 問題行動記録シート、WEBQUの活用がいま一つである。WEBで行うことのメリット、デメリットはあるが、有効活用できる体制を構築していきたい。
次年度への改善策	初期対応のための情報共有・対策チームの協議をきちんに行い、チームで丁寧に対応する。

## 令和5年度 学校評価

評価の項目	③ キャリア教育・進路指導
今年度の重点目標	系統的な指導と、自分の将来を考えた進路選択をする能力・態度を育成する。
具体的取組	特別活動を扇の要として、総合的な学習の時間は勿論、全教育活動を通してキャリア教育を行うための全体計画を作成し、3年間を見通した指導を推進していく。
担当	進路指導主事・各学年進路担当
現状及び取組状況	1年生では、人間関係作り、就労の意義、2年生では、進路と職業の選択、3年生では既習事項をさらに深めるために、夢授業やライフプランニングを通して、自分にふさわしい進路、職業、人生設計について考える。
評価の観点	(成果指標) 様々な活動を通して自分の将来について意欲的に考える生徒が増えた。
実現状況の達成度判断基準	学習・生活アンケート(生徒③)「将来の夢や目標を持っている」が、 A 85%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満
判定基準(備考)	Dの場合は、指導体系・方法を再検討する。
中間集計結果(%)	B(81.9%) ※75.0%(R4, 12)
分析 (成果と課題)	成果 2, 3年生は肯定意見が80%を超えている。特に3年生は昨年60%であったことから、進学を意識した結果であるといえる。 課題 1年生は75%と他学年および昨年度の1年生より低い。
今後の改善策	1年生に関して、今後キャリアパスポートを活用するなどして意識を高めていく必要がある。
最終集計結果(%)	B(75.5%) (1年:67.7 2年:74.6 3年:84.2)
中間結果との差(%)	-6.4%
分析 (成果と課題)	成果 3年生は80%以上が肯定意見である。進路を意識して自分の将来について考えるようになっていったと考えられる。 課題 1, 2年生は中間調査より減少した。1年生は職業調べは行ったが、職業人講和が中止となるなど十分な指導時間がとれなかったことが要因であると考えられる。
次年度への改善策	キャリアについて学活を中心に行っていく。特に1, 2年生については年間を通じて指導を行う機会を設けることが必要である。

## 令和5年度 学校評価

評価の項目	④ 保健管理
今年度の重点目標	基本的な生活習慣を定着させる。特に歯や口の健康づくりや睡眠時間の改善を図る。
具体的取組	生徒保健委員会の活動で、正しい生活習慣に関する知識を広め、母親委員会との協力で家庭との連携を考えていく。また、学校保健委員会等で家庭・地域と情報を共有し、基本的な生活習慣の定着につなげる。
担当	保健主事
現状及び取組状況	むし歯の治療率は年々高まってきているが、春の検診で再びむし歯になっている生徒が多い。またTV・ゲーム・ネットなどで睡眠時間が少なく体の不調を訴える生徒がいる。
評価の観点	(成果指標) むし歯の治療率が向上したか。
実現状況の達成度判断基準	歯科検診でむし歯があった生徒の治療率が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満
判定基準(備考)	むし歯治療済みカードの回収率。 C・Dの場合は、取り組み方を検討する。
中間集計結果(%)	D(44.4%)
分析 (成果と課題)	成果 治療勧告をしてから夏休みに入るまでの治療がほとんど進んでいない状況であった。対象生徒の保護者へ再度通知し(懇談会で)、8月18日現在40%をこえたところである。8月中に受診する予定の生徒が多くいるため、8月末の結果に期待したい。 課題 夏休みに入る前までの治療が少ないことと3年生の治療率が悪い。
今後の改善策	受診をしない生徒への個別指導(歯と口の健康について・受診の大切さについて)と保護者への受診の依頼
最終集計結果(%)	B(80.4%)
中間結果との差(%)	+36.0%
分析 (成果と課題)	成果 夏休み中にかなりの生徒が歯科治療を行ってくれた。通知表渡しの際、未治療の保護者に記入してもらった「治療の様子」(予定を書き込んでもらう)ことで意識が高まったのではないかと思う。今後、生徒個人への指導も続けていく。 課題 意識が低い家庭への働きかけをどうしていくか。また、不登校で健診自体できていない生徒への働きかけをどうするかが課題である。
次年度への改善策	歯科検診終了後直ちに学校歯科医・担任と連携し、未検診者及び治療が必要な生徒への個別指導を行う。また、生徒保健委員会の活動で生徒の意識を高めていく。

## 令和5年度 学校評価

評価の項目	⑤ 安全指導
今年度の重点目標	校内の避難経路の確保と日頃の安全管理に務める。
具体的取組	校内の危険箇所を把握した避難訓練，更にいろいろな場面を想定した避難訓練の実施。さらに防災教育に取り組むことで，自身の命は勿論，大切な人の命を守るための行動をとれるようにする。
担当	教頭・防災安全担当
現状及び取組状況	校内の危険箇所を把握していながらも，その解決にまでいたっていない。
評価の観点	(成果指標) 安全点検によって危険箇所が改善されているか。 また適切な防災教育が行われたか。
実現状況の達成度判断基準	教職員アンケート（教師③）で 「職員が安全点検を行い，危険箇所が改善された」が， A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満
判定基準（備考）	C・Dの場合は，方法・内容について再検討する。
中間集計結果（％）	A(82.0%) ※94.0%(R4, 12)
分析 (成果と課題)	成果 安全点検は年3回を計画し，1学期の点検は管理責任者を中心に行っている。また，防災教育においては，地震からの火事を想定し消防署とともに取り組むことができた。3年生の修学旅行では阪神淡路大震災の現地に行き，展示や体験を通して学習することができた。 課題 日々の点検で緊急な改善を必要とする危険箇所などは，速やかに報告し改善してきているが，以前より確認している箇所については予算の面からも全て改善することができていない。
今後の改善策	安全点検からの危険箇所や変化等を細かく把握する。 生徒主体の防災学習を進める。
最終集計結果（％）	A(92.0%)
中間結果との差（％）	+10.0%
分析 (成果と課題)	成果 避難訓練を年2回行い，生徒と真剣に取り組んだ。3年生の防災学習についての発表があり，周りの人や自己の命を守る行動，減災に向けての意識を高めることができた。 年に3回の安全点検では，危険な箇所を把握している。 課題 今年度，3年生の防災学習の発表はできたが，生徒が誘導する等の避難訓練を行うことができなかった。 校舎の壁の剥がれや細かい亀裂については把握しているが，修繕することができない。
次年度への改善策	非常事態にどのように動くか，自分事として最善な対応を考えられるような，生徒主体の避難訓練を計画する。 安全点検を生徒が活動している状況を考え，もしかしたらという想定をもち点検を行う。安全であると確認した場所においても，窓際の設置物や固定されていない棚などの点検を再度行い，リスクの低減になるような手だてを行う。

## 令和5年度 学校評価

評価の項目	⑥ 特別支援教育
今年度の重点目標	校内委員会を月に一回程度開催し、情報交換や生徒理解に努め、3層支援を通して生徒一人一人の状況を把握し、個を対象とした効果的な支援方法について検討する。
具体的取組	SWPBSについて校内委員会や研修会を通して、全教職員で共通理解・共通行動を図る。学年会や生徒指導委員会、教育支援員、SC、専門相談員等と連携してより具体的に個々の支援の方法、内容、変容効果について検証し、実践していく。
担当	特別支援コーディネーター（生徒支援委員会）
現状及び取組状況	事例検討会や校内研修会を開催し、支援の方法を検討している。
評価の観点	（成果指標） 生徒は学校が楽しいと感じているか。
実現状況の達成度判断基準	学習・生活アンケート（生徒⑧・②）で 「学校に行くのは楽しいと思う」と「先生はあなたのよいところを認めてくれている」が、 A 90%以上 B 85%以上 C 80%以上 D 80%未満
判定基準（備考）	一方でDの場合は、原因を分析し、取組を検討する。
中間集計結果（%）	B(88.3%, 89.4%) ※85%(R4, 12)
分析 （成果と課題）	成果 達成度はB（85%以上）に分類されるが、88.3%、89.4%と高評価となっているといえる。 課題 評価としては高いが、アンケートに現れない本当の気持ちを普段の生活の様子から読み取っていく必要を強く感じる。
今後の改善策	ふれあい面談週間の活用や、教育支援員との情報交換を密に行い小さな変化を見逃さないようにしていく。
最終集計結果（%）	B(89.2% 1年:91.9 2年:89.8 3年:85.9) B(87.8% 1年:82.2 2年:88.2 3年:93.0)
中間結果との差（%）	B(+0.9%) B(-1.6%)
分析 （成果と課題）	成果 「学校に行くのは楽しいと思う」の項目は最終集計でも微増となっており、特に1年生で90%、を越えている。しかし、アンケートに回答していない生徒や機械的に入力している可能性は否定できない。「先生はあなたのよいところを認めてくれている」では3年生の評価が高いが、大きな行事を成功させたことや、こまめなPBSの取組による効果が出ていると考えられる。 課題 数字に現れない部分を常に意識しながら、生徒の本当の気持ちを想像していくことが必要である。
次年度への改善策	ふれあい週間でSCなど外部の人材を活用できるように調整する。

## 令和5年度 学校評価

評価の項目	⑦ 組織運営・業務改善
今年度の重点目標	教員一人一人が学年担任制の意図を理解し、協働・協力できる職場環境の整備を通して教育の質と向上を図る。
具体的取組	学年担任制について校内研修会などを通して、全教職員で共通理解を図る。校務分掌をチームで分担し、効率化を目指す。
担当	業務改善チーム
現状及び取組状況	業務の属人化が解消されておらず、超過勤務時間が80時間を超える職員が数名いる。
評価の観点	(成果指標) 学年担任制を理解し、協働・協力して業務が行えているか。
実現状況の達成度判断基準	教職員アンケート(教師⑨)で 「学年担任制が業務改善に機能した。」の割合が、 A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満
判定基準(備考)	C・Dの場合は、原因を分析し、次年度の校務分掌や業務内容を検討する。
中間集計結果(%)	B(76.0%) ※昨年度類似項目74.7%(R4, 12)
分析 (成果と課題)	成果 学年担任制により、日常の担任業務に平準化が図られ、道徳や学活についても学年全体での当事者意識が高まった。 課題 見つかった課題に対してのスピード感ある組織的対応にやや不安が残る。
今後の改善策	生徒指導や保護者対応などに密な情報交換が求められる。
最終集計結果(%)	B(76.0%)
中間結果との差(%)	0
分析 (成果と課題)	成果 担任ローテーションが順調に行われ、全体にも目に見える形で示すことができている。窓口、級外にとらわれず学年集団として当事者意識をより強くして生徒への支援や指導、保護者対応ができている。 課題 学校規模に起因する学年を構成教員数や基本的な担当授業時数が多いことなど、いくつかの要因によりかえって負担感を増しかねないこと。学年担任制では解決しきれない意識変革や個別の対応が迫られる。
次年度への改善策	ローテーションの時期や方法、校務分掌などに配慮し、負担感を少なくすること、全体を見据えたスクラップ・アンド・ビルドを行い、日常的な業務改善をますます進める。過重な分担や仕事内容を他の職員に委ねる(委ねられる)ことを推し進める。

## 令和5年度 学校評価

評価の項目	⑧—1 研修 組織的アプローチ（3層支援体制の確立）
今年度の重点目標	生徒がわかった、できた、もっとやりたいと感じられるように学校規模での第1層支援を通じて、第2・第3層支援が必要な生徒を洗い出し、配慮を必要とする生徒に対しての支援の方法を協議し、具体的支援を行うことで、学習意欲と学力の向上を目指す。
具体的取組	生徒がわかったと感じる機会を増やし、学習意欲と学力の向上を図るために、各教科・領域・学年で工夫している内容を提案授業、研究授業、個別の指導計画等でわかる授業の実現を目指す。
担当	研究主任
現状及び取組状況	教科の枠を越えた授業研究を実施している。 生徒の学びが図られる環境をつくる、授業規律の確立を行っている。
評価の観点	（成果指標） わかった、できた、もっとやりたいという生徒の学習に対する意識を高められたか。
実現状況の達成度判断基準	学習・生活アンケート（生⑰）で 「授業の内容がわかりやすい」が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 60%未満
判定基準（備考）	C・Dの場合は、原因を分析し、次年度の研修内容を検討する。
中間集計結果（%）	A(92.0%) ※92.3%(R4, 12)
分析 （成果と課題）	成果 第2層支援の生徒への手立てを意識してできていた。 課題 具体的にどのような支援を要するのかを全職員で共有する。
今後の改善策	LITALICOを使用し、誰が支援しても同じ支援ができるように共有する。また、どのような支援がより良い支援になるか検討していく。
最終集計結果（%）	B(86.2%) (1年:79.6 2年:89.5 3年:89.5)
中間結果との差（%）	-5.8%
分析 （成果と課題）	成果 2,3年生より1年生の生徒が授業の内容が分かりにくいと答えている生徒が多い(20%)ということが分かった。 課題 その20%の生徒へ支援することができなかったこと。
次年度への改善策	第1層支援の充実を図り、その後LITALICOを活用し、ポイントを絞った生徒への支援を話し合う場の設定を行うことが必要である。1度で終わることなく、その生徒に対しての継続した支援が必要である。

## 令和5年度 学校評価

評価の項目	⑧ー2 研修 SWPBS + Swaton Company
今年度の重点目標	学校規模でのポジティブな行動支援によって、生徒一人一人の好ましい行動を引き出し、自己肯定感や主体性を醸成する。そのための学年担任制であることを教員が理解し行動する。また、その効果的な場面設定の一つとして、Swaton Company (生徒による会社の起業・経営)を設立する。
具体的取組	学年担任制の意図を共通理解し、SWPBSに努める。併せて保護者への協力も求めていく。Swaton Companyの設立元年である今年度は生徒会を中心に取り組んでいく。
担当	研究主任 生徒指導主事 教務主任
現状及び取組状況	SWPBSの共通理解・共通行動について脆弱な部分がある。
評価の観点	(成果指標) SWPBSが生徒の主体性を高めた。
実現状況の達成度判断基準	学習・生活アンケート(生⑨)で 「自分の考えを表現したい(行動したい)と思うようになった」が、 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 60%未満
判定基準(備考)	C・Dの場合は、原因を分析し、次年度の研修内容を検討する。
中間集計結果(%)	B(84.5%) ※R5新設につき、比較データなし
分析 (成果と課題)	成果 Good Behavior Ticketなどの配布により、正しい行動をすぐに称賛することも結果の要因として考えられる。SwCo.は7月から実動し、生徒の主体性がうかがえる。 課題 学年が下がるにつれ、アンケートの値が下がっている。
今後の改善策	表舞台に立ちほめる機会が多い3年生だけでなく、普段の生活からPBSマトリクスの指標に当てはまる行動を称賛していく。SwCo.への参加(運営)を通して、参画意識と自己肯定感の向上を求めていく。
最終集計結果(%)	C(73.9%) (1年:62.9 2年:74.6 3年:84.2)
中間結果との差(%)	-10.6%
分析 (成果と課題)	成果 Good Behavior Ticketの継続により、生徒の良い行動を継続させ、称賛することができていた。 課題 マトリクスの指標を意識して、Good Behavior Ticketを配布していく。また、マトリクスも来年度改善していく。
次年度への改善策	・PBSマトリクス表の改善 ・自分の思いを表現しやすい人間関係の構築

## 令和5年度 学校評価

評価の項目	⑨-1 保護者，地域との連携
今年度の重点目標	情報公開を充実させ，保護者や地域の方との連携を深める。
具体的取組	学校の情報が滞らないように保護者は勿論，地域へも発信していく。
担当	教頭・情報担当
現状及び取組状況	HP，メール配信では7割程度しか情報や，学校の状況が伝わっていない。
評価の観点	(成果指標) 学校の取組が保護者に伝わったか。
実現状況の達成度判断基準	保護者アンケート（保護者①）で 「学校だよりや配信メール，HP等によって学校の様子が伝わった。」が， A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満
判定基準（備考）	C・Dの場合は，方法・内容について再検討する。
中間集計結果（%）	C(78.8%) ※78.8%(R4, 12)
分析 (成果と課題)	成果 学校だよりやHP等をこまめに配布・更新することで，保護者へ学校の取組を知らせている。 課題 アンケート結果は昨年度と同様で改善されていない。
今後の改善策	タイムリーに保護者へ取組が伝わるよう，コドモンの運用方法を全職員で確認し，丁寧な発信を行っていく。ペーパーレス化についても考えていく。
最終集計結果（%）	B(84.3%) (1年：87.1 2年：83.4 3年：82.5)
中間結果との差（%）	+5.5%
分析 (成果と課題)	成果 学校からの案内や通知は，紙媒体だけでなくコドモンに添付して送れるようになり，保護者へ連絡が届きやすくなった。また，全小中学校統一のため，市教育委員会からのお知らせも保護者に届くようになった。行事や学校公開などでは，来校の制限がなくなったことで保護者や地域の方に生徒の活躍する様子を観てもらうことができた。そのことから学校の状況や取組を知らせることに繋がった。 課題 保護者アンケートでは，1，2年生の数値は上がっているが，3年生の数値は下がっている。
次年度への改善策	行事や学校公開・PTA活動などは，コドモンやたよりで早めに保護者に知らせるようにする。 地域との関わりを増やすことで，学校の取組を知ってもらう機会とする。

## 令和5年度 学校評価

評価の項目	⑨-2 保護者、地域との連携
今年度の重点目標	学校運営協議会の設立に向けて準備を行う。
具体的取組	学校運営協議会の設立に向けての会議や研修を進める。
担当	教務主任・教頭
現状及び取組状況	学校運営協議会設立元年であり、職員にも十分に周知されていない。
評価の観点	(成果指標) 学校運営協議会の準備委員会の進捗状況と協議会について職員に周知されたか。
実現状況の達成度判断基準	教職員アンケート(教師 <sup>③</sup> )で 「学校運営協議会について周知され、準備が進められた。」が、 A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満
判定基準(備考)	C・Dの場合は、方法・内容について再検討する。
中間集計結果(%)	A(94.0%) ※88.0%(R4, I2)
分析 (成果と課題)	成果 学校運営協議会の人選から事務局の設立、学校ランドデザインを基にした方向性を確認できた。 課題 具体的な連携・協働体制の構築ができていない。
今後の改善策	地域づくり、働き方改革、地域総掛かりの子ども育成などの観点から、具体的な取組を模索する。
最終集計結果(%)	B(75.0%)
中間結果との差(%)	-19.0%
分析 (成果と課題)	成果 学校行事等への案内を行い、体育祭では生徒の活動を間近に、応援・評価を行っていただいた。 課題 地域づくりや地域総掛かりの子ども育成などの観点からは、計画性にも参画の機会にも乏しい。CS委員からの意見反映の機会を設ける必要がある。
次年度への改善策	地域づくりの観点から、SwatonCompanyとの交流を行い、生徒との有意義な交流を模索したい(SwCo.へのアドバイスなど)。また、活動内容を都度発信し意見交換を随時行う。

## 令和5年度 学校評価

評価の項目	⑨-3 教育環境整備
今年度の重点目標	授業でのICT活用の推進
具体的取組	GIGA研修を行うことや、ICT機器の操作方法を理解し、授業で適切に活用できるように取り組む。
担当	GIGA担当者・教頭
現状及び取組状況	一人一台のPCが配備され、授業および朝礼等で使用はしているが、その使用には個人差があり、ICT機器の効果的な活用にはいたっていない。
評価の観点	(成果指標) アプリケーション指標項目10個のうち、いくつ授業で活用できるようになったか。
実現状況の達成度判断基準	教職員アンケート(教師③4)で 「アプリケーション指標の中で、授業でいくつ活用できたか」 が、 A 6個以上の職員割合が80%以上 B 6個以上の職員割合が60%以上 C 6個以上の職員割合が40%以上 D 6個以上の職員割合が20%未満
判定基準(備考)	Dの場合は、方法・内容について再検討する。
中間集計結果(%)	B(71.0%) ※60.0%(R4, I2)
分析 (成果と課題)	成果 計画訪問に向けて日常的にアプリケーションを使ったため慣れがでてきた。全校集会をオンラインで行うなど学校全体でICTに前向きである。 課題 eライブラリ、ミライシードの活用が少ない。授業で黒板と同時に使うとタイムマネジメントが難しい。
今後の改善策	夏休みに、ミライシードeライブラリの研修を受ける。普段から使う機会を増やすように、分かる人が活用方法を教える。
最終集計結果(%)	B(77.0%)
中間結果との差(%)	+6%
分析 (成果と課題)	成果 Meetを使った全校集会や、フォームを使ったテストなど、先生型が積極的にICTを使う様子が見られた。ICTサポーターに資料を作ってもらうなど活用している様子が見られた。 課題 「著作権の表し方を授業で活用できている」の割合が少ない。ミライシードが活用できていない。
次年度への改善策	次年度最初の各授業で、情報モラルや著作権の表し方について、ICTサポーターに作成してもらった資料をもとに生徒に伝える。ミライシードの使い方についてICTサポーターに資料を作成してもらう。

## 令和5年度 学校評価

学校評価関係者意見〈学校運営協議会委員からの意見〉	
評価の項目	内容
⑧-2 研修 SWPBS+SwatonCompany	<p>・令和6年度は、保護者の意識を把握し、生徒を学校と家庭がともに見守り育む土壌を構築すべきである。</p> <p>A 委員：「明日 SwatonTime があるのが楽しみ」と話題になっていた。子どもにも保護者にもよい影響を与えている。</p> <p>B 委員：登校しぶりの状況にある生徒にも興味をもつ仕掛けなのでは？</p> <p>学校：C4th への保護者連絡には「SwatonTime があるので学校に行く」との内容が、散見していた。</p>
	<p>・加賀市教育委員会の推進する「BE THE PLAYER」の端的なものであり、今後も生徒主体の活動を継続してほしい。</p>
	<p>・地域に開かれた活動をもって、地域丸抱えの生徒育成に賛同したい。CS を活用し、情報（受発信）、協働意識のあり方をも模索してほしい。</p> <p>A 委員：各種業界には、中学生に対して次世代を担ってほしいとの期待がある。是非とも連携を考えてほしい。</p> <p>学校：SwatonCompany 事務局を通じて生徒に募集をかけ、参加を促したい。積極的なキャリア意識の形成と拡充につとめたい。</p>